

目次

| | |
|----------|----|
| 銀の夜 | |
| 奥付 | 16 |

銀の夜



☆

この物語は、ある冬の夜に僕が書きつけた文章について、その理由をめぐる長い言い

訳だ。文章の言い訳がどうして物語なのか、回りくどさに自分でも呆れるのだが、それでも生きていく僕は、恥と諦めと欲望で現実を装飾しよう。

肉をくわえた犬が、川面に見たもう一つの現実へ、抑えきれず吠えた惨めさにならなくて。

★

その日、さして実りのない講義の後でアパートへ戻ってみると、部屋の前に父親が座っていた。ドアの前にあるコンクリートの小さな段差に腰掛けていた彼は、僕を見つけると「やあ」と言って右手を上げ、ゆっくり立ち上がり尻を三回叩いた。パン、パン、パン。

「どうだ、調子は」

鋭い冷気が陽気な声を白く凍りつかせた。僕が眉をひそめてその白々しさを眺めている間、父親は目を逸らしてアパートの前に広がる畑を眺めていた。実家では今でも畑いじりをしているはずだ。その頬や鼻が、冬の寒さで丸く赤かった。

「いいところだな。畑もあるし」

僕は何か答えねばならないのだろうか。

「...ああ。そうだね」

そう言うと、同じように父親のしている畑のほうを眺めてみた。おじいさんが一人でいつも通り何かを燃やしていた。煙があたり一面に薄いモヤを作っている。さて.....

「...いつからいたの？」

僕はその言葉に1mmもトゲを入れないよう注意を払った。笑いかけはしない、だが、突き放すワケでもない。

「いや、ちょっとな」

いや、ちょっとな。

僕はジーンズのポケットからカギを取り出し、自分の部屋のドアを開けた。

「入るんでしょ？」

「ああ」

追い詰めるつもりはない。もちろん。追い詰めたいワケじゃない。僕は何度も自分に言い聞かせた。僕に何ができる？ 僕に何が言える？

とにかく、僕は父親を部屋へあげた。

「きれいだな」

ちょうど昨日掃除したばかりだ。

「うん。昨日、掃除機かけたからね」

「うちに比べると狭いな」

もちろん、他意はないはずだ。父親は、実家に比べると僕のうちのほうが狭いということを行っているのだ。そりゃそうだ。他に意味なんてあるはずがない。

「そりゃ実家に比べればね。家賃だって安いし」

「いくらだ？」

「四万二千」

「そりゃ安いな」

僕のアパートは大学から徒歩 10 分圏内で、他のアパートと比べても相場の一万円近く安かった。おまけに壁も厚くキッチンも備え付けのコンロが二口付いているし、一階だが角部屋で窓も三つあり紛れもなく好物件だ。残念なのはバストイレ共同なのと冷蔵庫を置く場所が狭いくらいで、それでも収納だってそこそこだし、洗濯機だって共同のを無料で使わせてもらってる。別に強がってるわけじゃない。父親に何を言われようとそんなことは関係ないのだ。もちろんそうだ、しかし……

身構えている自分を発見するのはあまり気分のいいものではない。それでも、そうせざるを得ないときもあるだろう。僕は自分を納得させるのにどれほどの自己弁護が必要か、考えそうになる頭を振って制した。

父親は六帖の部屋の真ん中に立ってうろうろと辺りを見回している。それを横目に流しで手を洗った。真冬の水の冷たさが思考を中断させる。少し楽な気持ちになれた。父親はまだ突っ立ったままだ。

「とりあえず座ったら？」

「ん？ ああ」

父親は机の上に置いてあった座布団を一つ取り、床へ敷いて座った。そりゃそうだろう、座布団くらい敷くさ。なぜ僕はこんなにも警戒しているのだろう。いや、それは仕方のないことだと思う。でも……

「…母さんは、知ってるの？」

「ん、なに？」

「いや」

いや。いや。いや。

わかったよ。そうじゃない。僕が言いたいのはそんなことじゃない。

「俺の家は、どうして知ったの？」

「ああ、タクシーに言って」

「そう」

「…来ちゃダメだったか」

「いや。そんなことない」

そんなことない。大丈夫。大丈夫だ。自分に言い聞かせるためだけの言葉。

「兄貴とか、誰か知ってるの？」

「…いや。言ってないよ」

「そう……」

さて、最後の仕上げだ。

「ああ、のさ」

「ん？」

今日は……

「今日さ。俺少し遅くなるからさ」

「なんだ？」

「いや、バイトあるから」

「そうか。お前は今どんなところで働いてるんだ？」

「中華料理の店」

「中華か、お父さん中華好きだな。どれ、ちょっと見に行ってみようか。どんなところで働いてるか」

「やめて、無理だよ。高級中華だし。料理一皿 2000 円以上するよ。来られても困るし」

「そうなのか」

「夜はなんか食べて。適当にそこらで買ってもいいし。もしあれなら兄貴に連絡したら来るかもよ。近いし。兄貴と一緒に食ってもいいでしょ？」

「... ああ。それでもいいな」

「うん。俺、バッグ置きに来ただけで、すぐ出るから」

「そうか」

父親は窓の外を眺めていたが、隣にテレビがあるのに気づき、ああ、あれはリモコンを探しているのだと思う。別に僕の部屋を片っ端から物色したいワケじゃないはずだ。積んでおいた本の山を二つほど崩し、さらにもう一つ目にとりかかろうとしている。

「いや、あんまそこらには触らないで。ごめん、リモコンでしょ？ うちにはないんだ。テレビつけるときは下のボタン押して」

「わかった」

父親はそうやって僕に尻を向け、というよりも尻を浮かして、テレビの画面をつけた。テレビのニュースが今朝あった火災か何かの放送をしていた。なんでもいいんだ。とりあえずテレビさえついてれば、なんでもいい。僕は自分に向かって何度もそう言った。

★

約束の時間に五分ほど遅れて大学のロビーまで行ったが、そこにはまだ彼女の姿はなかった。備え付けの柱時計は五時半ちょうどを指していて、僕の時計とは五分違いだった。

「やあ。お待たせ」

彼女は後ろから僕に声をかけた。振り返ると、少し濃い目の口紅とアイシャドウをつけた彼女が立っていた。

「あ、いたんですか、いつから？」

僕はなぜこの人に敬語を使うのだろう。年上だからか？ いや、たぶん、楽なんだろうな。自分は敬語を使って話すほうが楽な人間だと感じる。他人との距離間に癖があるのだろう。それは父親のせいなのだろうか？ と不意に疑念が湧く。

「ちょうど今来たところ。で、どこ行く？」

彼女はベージュの膝上丈のコートと、そこから少しはみ出す短めの黒いスカートを履いていた。コートの上からは胸元の膨らみが見て取れず、その代わりにくるぶし丈のブーツからスカートまで、薄手のストッキングから透ける両脚に目がいった。

「そうですね。いつも通り駅の近くで何か食べて、その後公園でも散歩しましょうか」

「いいね。そうしよう」

父親は今ごろ、あそこでテレビを見ているのだろうか。テレビはまだ火災か何かの

ニュースを流しているのだろうか。

「どうしたの、行こう？」

「あ、そうですね」

僕は慌てて彼女の後に着いた。

バス停で待っている間、大学の建物をぼんやりと眺めていた。首都近郊のこれと違ってとりえのない田舎に建てられたとりえのない建物で、とりえのない人々の通うとりえのない大学だった。いっそのこと海中にでも沈めてしまったほうが、大陸棚を拠点とする魚たちの快適な住み家として今よりずっと重宝され、建築士だって表彰されるかもしれない。あなたがたは新鮮な魚と若い漁師たちを再び呼び戻し、我が漁村の未来に大きく貢献したことによってここに……

「ねえ。聞いている？」

彼女が僕に声をかけた。ちょっと苛立っているようにも感じる。

「聞いてますよ。何食べようかって話ですよ」

彼女は僕の目を見ている。僕も彼女の目を見ている。一、二、三を数える前に彼女が先に口を開いた。

「どうした、なんかあったか？」

「いや、別に」

「ふうん」

また何か言わなくてはいけない気がした。

「何もないですよ。もちろん、心配してもらってるならうれしいですけど」

「ねえ。心配されるくらいでうれしいなんて言わないで。それは友達として当然でしょ？」

友達という言葉に力が入っている。不意に、復讐されている気分になる。「兄貴と一緒に食べればいい」僕はわざと父親に言った。両親の離婚以来、父親と兄はほとんど口もきいていないのだ。

「ありがとうございます。でも大丈夫です。本当に」

「そう？ ならいいけど」

両親の離婚について誰かに話したことはなかった。ことさらに話すようなことじゃない。

「何食べますか？ そういえば例のパスタの店」

「この前、混んでたところ？」

「はい。あそこ空いてたらいいですね」

「そうだね。あそこにしようか」

彼女、みずほさんと連れ立って食事をするのも、もう何回目だろう。みずほさんは今年から大学に編入した3年生で、一浪した自分の3つ年上だった。

「そういえばこの前の、笑いについてのレポート読んだよ」

「え、早いですね。うれしいです」

「うん。なんか面白かった。分かんない部分もあったけど。あの、意味のズレと、強調のズレって？ あれどういう意味？」

「細かく読んでくれたんですね。ありがとうございます」

自分が書いた内容を思い出すのに少し時間がかかったが、話し出すと止まらなくなった。

「きっかけは、シュールな笑いとベタな笑いでどこが違うのか、考えていたことなんです。

結論から言うと、意味がズレていくとシュールな笑いになる、ワケわからんけど面白いってタイプの笑いです。逆に強調がズレていくとベタな笑いになる、リアクション芸みたいにやることは単純でも、派手な口調や動きで笑いを取るタイプです。意味と強調、両方のバランスで笑いは成り立っていると考えました」

「うん」

「そもそも笑ってのは構図のズレです。自分の常識的な構図とどっかズレてるから、なんか可笑しくて笑う。そして昔から笑いはいろんな分類をされています。ユーモア、エスプリ、ウィット、パロディ、ジョーク等。それらは他人の分類ですが、自分が考えた分類では、笑いを解析するために縦軸と横軸を設定して、縦軸を意味のズレ、横軸を強調のズレにしました。

例えば『おはよう』という言葉分解すると、挨拶、朝、元気、親しみ、とかいろんな意味がくっ付いていると思います。それらの意味をズラせば、笑いに結びつく可能性があります。例えば挨拶という意味をズラすなら、挨拶をするべきでない場面、足の小指をぶつけて『おはよう！』と怒鳴っちゃうとか、ヨン様に間違われたとき『おはよう』って軽く会釈するとか」

「レアすぎる場面だね。『おはよう』って会釈したら、もうヨン様本人じゃん。『私たちはファミリーです』って微笑でさ」

「ま、例えですから。んで、本来その場面にふさわしいセリフは、『痛ってえ！ この糞ダンスが！』とか『人違いです。私はヨン様ではありません』ですよね。本来の構図からズレてるから笑いが起こるワケです。そしてそのズレを更に細かく分析すると、意味のズレと、強調のズレが見えてきます。

小指をぶつけた例をあげるなら、本来、『痛い！』という突発的な叫びを上げるはずが、『おはよう』という慣例的な挨拶にズレている、これが意味のズレです。んで、本来『おはよう』は平常のトーンで言うべきなのに、『おはよう！』という切迫したトーンに変わっている。これが強調のズレです」

「う～ん」

「難しいですか。でも実は、更に更に分類すると意味と強調は厳密に分けられなかったりするんで、この理論はどっか間違ってると思うんですけど。あとは、たくさんの意味のズレを同時に起こすネタのほうが、笑いは大きいとか」

「やっぱわかんないわ。そうかもしれないけど、違うような気がする」

「そうですか」

それでも彼女の唇の赤い動きが、この会話を何か特別なものにしようとしている。見とれているうちに気づくとバスがやって来ていた。乗り込む時、彼女が先にドアステップを上り、後ろ姿の太ももと膝の裏がのぞき、僕は揺れるスカートの裾を見つめる。でも彼女が急に振り向いて視線に気づくかもしれないと、すぐうつむいてバスに乗り込んだ。

彼女の隣の席に着く。バスの座席はほとんど埋まっている。大学から駅まで、バスは混んだ大通りをゆっくりと走って行く。三十分はかかるんだろうな、五キロもない道のりなのに。彼女が呟くように言った。

「でも突っ込みと茶化しについて、あっちのレポートは納得した。面白いと思った」

「それはどうも。ありがとうございます」

突っ込みと茶化しについてはちょっとした思いつきで、オマケのつもりだった。

現在、文字通り人を叩いて突っ込む笑いが蔓延しすぎて、他者を許さず厳しく批判する風潮が社会現象になっている。ネットの炎上、ワイドショーのコメント、新聞や週刊誌の批判記事、一般でも理不尽なクレーマーがモンスター〇〇という名称で問題視されている。

だからこそ今逆に、突っ込みではない、茶化す笑いが台頭する可能性がある。もともと突っ込みが流行る以前は、イタズラで相手をからかう茶化しは一般的だった。「じゃ、真ん中を渡ればいいんですね」「ぎゃふん！」というような。相手を叩いてオトすのではなく、相手に乗っかって装飾してしまう。しかし、ゴテゴテ装飾しすぎると、元々の対象から乖離して意味がなくなる。そうして、すっぱり相手を斬りオトす突っ込みの単純さに負けたのだ。「橋は橋だろ、ハイ討ち首！」というように。

だが、突っ込みすぎて斬りオトす首が失くなった今だからこそ、再び茶化す文化で社会をかき回すタイミングが来ているはずだ。いずれ装飾が過ぎたらまた突っ込みで叩き壊せばいい。そして、そうだ。茶化して回る想像力が実体験を超えなければ、俺なんて何の書く意味もない。

「何ニヤけてんの？」

彼女が不思議そうに僕を見ている。

「え、ニヤけてます？」

「変わってるね。さっきまで死んだモグラみたいに暗かったのに」

「...それは確かに暗いですね。明るい要素一つもなしですね」

「ね。まあ、それは冗談にしても、ちょっと心配してたのは本当だよ」

「え？」

「犬を思い出すのよ。あの、川に映った自分に吠える童話あるじゃない。肉を落としちゃうヤツ。たまにあれに似てる」

「たまに似てるって、僕が？ え、どの辺ですか？ ってか逆に似るの難しくないですか？ イメージ的に？」

「たぶんあたしが子供のころ勝手に想像したんだろうけど、あの犬はただの欲張りじゃなくて、やさぐれてるイメージなんだよね。この世を恨んでるっていうか、ここじゃないどっか本当の居場所があるっていうか」

「触る物みなヤッてやるみたいなの？」

「それは違う。でもトオルくん、そういうときある、たまに。本当に大丈夫？」

「はい。それは全然」

彼女のイメージ自体はよくわからなかったが、本当に大丈夫かもしれないと無意味に思えてくる。こんな会話でも僕を勇気づけ、自分に意味がある気がして安心する。父親が何を食べるかなんて、心配するだけどうでもいい話だ。僕は無言で彼女の目を見つめ

る。

「なに？」

彼女の目がわずかに右へ逸れる。バスが静かに左へカーブを切り、目の前に駅の大きな建物が見えてくる。

「何だろう。天啓ですね。僥倖です」

「え？」

「つまり、一生一緒にいてくれや、って気持ちです」

僕はそこまで言い過ぎて財布を取り出し、小銭を探す仕草で彼女の返答を待つ。小銭なんてすぐには見つからない。彼女の返答を待っているからだ。

「ダメ。信じられない」

そしてバスはゆっくりと停車する。僕らは混んだ車内で立ち上がるタイミングを見計らっている。

★

運良くパスタの店が空いていたので、二人向い合わせに座って食べた。一緒に取り分けるタコのマリネサラダや牛ほほ肉のトマトソース煮以外に、僕はビールとさくら海老のクリームパスタ、彼女は少し体調が悪いと言ってノンアルコールのカクテルとトマトとバジルのパスタを注文した。とても美味しかったし、不安を忘れるほど楽しかった。コートを脱いだ彼女はノースリーブの襟元に白いファーの付いたピンク色のニットを着ていて、その視線がよそを向くたび、胸の膨らみや露わな肩に僕の視線は吸い寄せられた。一度、前かがみで胡椒を取る彼女がたまたま僕を見ていたので、糾弾されるようで怖かった。

食べ終わった後に二人で駅前の公園を散歩した。僕らの間には常に五十センチくらいの間隔があり、僕はいつもそれについて考えないようにしている自分に苦笑するのだ。そして彼女は、なに？ と聞く。その繰り返し。

繰り返しにもいいところが一つあって、それは我々が生きている今が永遠に続くかもしれないという錯覚を、ほんの少しでも与えてくれるところだ。だがそれは、やはり、当然、突然に終わりだってやって来る。

僕がそれに気づいたのは彼女が何か、たぶん他愛もない冗談だったと思うが、何でもいから何かを話すべき順番になってもうつむいたままで、僕がふと心配になって肩に手をまわそうか、でもやっぱ無理だと諦めかけたとき、そんな愚図の葛藤を払いのけるように前へ駆け出したことで起こった。彼女は数メートル先のトイレへ、しかし男性用のほうに駆け込み、僕は慌ててその後を追った。下を向いたままで気づかなかったのだろうが他に人はおらず、彼女は洋式便器を抱え込むようにして吐いていた。太ももが少し露わになっていたが、それはわかりやすく手っ取り早い幕引きでしかなかった。

「大丈夫ですか？」

彼女は近寄ろうとする僕を手で制し、僕はとにかく入り口で他に男が来ないか確かめた。真冬の暗い公園にはカップルが何組か、ベンチに座って微妙な身動きをするだけだ。

……いや、そんなところ見てる場合じゃなかった。

水の音が聞こえて彼女は水道で口を洗っていた。比較的最近建てられたきれいなトイレで明るかったので、それはさほどヘンな光景には見えなかった。

「ここ、男用だったんだね」

彼女はハンカチで口を拭いながら早口で言った。照明でくすんだ茶色がハンカチにこびりつくのがわずかに見え、あれが口紅だと気づくのに少し時間がかかった。僕も動転している。

「そうですね」

彼女は目を左に逸らし、僕の脇を抜けて公園の真ん中にある噴水のほうへ歩き出した。僕も慌てないように後を追う。

彼女はその噴水池の淵に腰を下ろし、うつむきながら何かを考えている。左手にハンカチを握りしめたまま、水銀灯の灯りがその白をなめらかに反射している。

「何か、飲み物でも……」

「いい」

ああ、いいのか。僕は彼女の脇に座るのを少しためらう。空に星はなく、僕は背筋を伸ばし思う。世の中は常に悪いほうへ動く。誰にとってでもない、僕にとって最も悪いほうへだ。想像力の遥か頭上を越え、スタンドの歓声と共にバックスクリーンへ消えていく鮮やかさで。僕に何ができる？ 僕に何が言える？

「つまり、できちゃったんですよね」

いともあっさりと僕の口から出た言葉が彼女を少し身じろがせ、何より僕自身を一瞬戦りつさせる。だが、言ってしまったものは元に戻らないし、戻すつもりもない。もっとザラザラとした感情が僕を包んでいた。

「…どうしようね」

「ね」が付いている、と思う。僕は、「ね」が付いていると思ったんですよ今、と言いたくなるのをこらえる。「ね」が付いてるってことは、あなたはもう、これを知っていたってことじゃないですか。

「…どうしたいんですか？」

「どうしたらいいと思う？」

僕は、またか、と思わないように必死で、耳元で囁かれたその声が父親に似てる気がして、振り返ると灯りの下で父親が母を殴りつけ、ダイニングのテーブルに背中をぶつけた母が震え、金切り声を上げているあの光景が蘇りそうで、それでも父親はそこまでひどい男ではないのだと、また何度も自分に言い聞かせた。それは数年に一度、母があまりにも厳しく言いすぎ、更に父親が酒をしこたま飲んだときにだけ起こる出来事だった。やはりいやな光景だったが、彼はただ器の小さな人間なのだ。その諦観はある一定の恐怖を伴ってもいた。僕もいつかこの程度の人間になるのかもしれない。少し遅めの反抗期にはそんな自分の血をひどく憎んだりもしたし、同時に彼の逆鱗に触れないよう絶えずびくびくもしていた。だが、飢えて死ぬ子供もいる。犯罪を起こす親だっている。そこまでのことじゃない。大したことなんかじゃないのだ。

なぜこんなことを思い出しているのだろう。家に帰れば、そこに父親がいる。腕についたデジタル時計を確認すると、21時少し前だった。父親が数年前、パチンコで当てた

金で僕に無理やりあてがったチタンの文字盤時計はもうなくしてしまった。

「確かに、言っていましたもんね、前。子供でも出来たらって。こういうことだったんですね。知らなかった。...それで、どうするんですか？」

「...結婚、しようかな」

「ふうん」

それはひどく冷たい池の水を反射して水銀灯の灯りに吸いこまれたような気がした。我々の間の沈黙を十二月という季節はあまりにも肌寒く風にとかす。

「...いや。そうですね。そういうこともあるんじゃないかなって、思っていましたし。向こうにとっては、あなたの彼氏にとってはすごく都合がいい、思う壺みたいな気がしますけど。ただ一般論で言えば、結婚と子どもは一度分けて考えたほうが、じゃないと全員が不幸になるかもしれないとは思いますが。まあ僕の意見なんて意味ないですけど」

彼女はうつむいて、話の続きを待っている気がした。だがもう一息吐けば、それは真っ白に目の前を通りすぎていくのだろう。見たくない僕は目をつむって続けた。

「大丈夫ですよ。彼氏といい感じだって言ってたじゃないですか。幸せになれますよ。もし何か、これでまた向こうがあなたと一緒に悩んだりせず結婚をゴリ押しするようだったら、そんなときは俺でよければ話を聞きますし。もしもこのことであなたがまた泣いても俺の胸なら空いてますし」

喉が乾いている。長くしゃべったせいだけではない。僕はきちんと完走できたのだろうか、少し不安になる沈黙が続く。

「ありがとう」

彼女は小さくそう言う。

違う、お礼じゃない。あなたがさっき言ったんですよ。心配するのは.....

「当然のことですよ。...とりあえず、俺にとってはね」

「...うん」

彼女の返事はそこで終わり、その後には長い沈黙が続いた。それでも彼女は少し喜んでいるようにも見えたし、それでも僕は黙ってありえない続きを待っていた。もちろんいろいろと、ぎゅっと抱きしめるなら今しかないとか、ピンチはチャンスだとか普段なら鼻で笑って歯牙にもかけない声援が聞こえたのだけれど、それらは全部聞き逃したことにして、僕はただ彼女の隣に腰掛けたまま動かないでいた。そして僕の22歳は童貞のまま更けていった。

★

その日、彼女を21時すぎの電車で帰した後で、僕は公園近くの電話ボックスから母の自宅に電話をかけた。十回を越えるコールの後で、少し眠たげな声が聞こえて、僕はホッとした。

「...もしもし」

「あ、僕だけど」

「うん」

眠たげなその声にすぐ用件を切り出すことにした。

「あの、オヤジのことなんだけどさ」

「...あの人がどうかしたの？」

彼女の声が少しこわばるのを感じた。

「いや、っていうか今、俺んちに来てるんだよ。...なんかあったの？」

「私はもうそういうの、全然わかんないからあれだけど」

「ああ、そうか。ま、そうだね」

「うん。ごめん」

それ以上何か話す言葉もなく、母も同じだった。だがその後ろで「おい、早くしろよ」という男の声が聞こえたとき、そんなことをすればあとで後悔することはわかっていたが、受話器を電話ボックスに置いた。

目の前の電話はもうどこも繋がっておらず、だが母が受話器を持った右手を見つめている姿を考えるのは、やはり苦痛だった。それが、たとえ誰でもいいから彼女の傍にいる誰かによって和らげられるのであれば、それは正しいことだろうと僕は思う。そして自分がどういった点からみても子どもであるという事実を、苦く飲み込まねばならなかった。

★

大学前のバス停で降りた僕は酔っていたこともあり、歩いて家へ辿り着けそうになくそのまま大学のゼミ部屋へ向かった。非常階段を上り、カード・キーで4階のドアを開ける。たまに昼夜逆転した学生が、深夜でもレポートの課題本を読みに来たりする。しかしその日は誰もおらず、エアコンの暖房を最大にしたままパソコンの椅子で気絶するように眠りこんだ。バスを降りて一人になってから数分間、止まらなくなった嗚咽で涙と鼻水がずるずると、いったい何がどうすればこんなにも出てくるのかと滑稽なほどで、惨めさにふっと笑いが出た次の瞬間にはもう意識がなくなっていた。

首をだらりと後ろに垂らした不自然な体勢のせいか、眠りは小一時間で覚め、涙と鼻水が乾いてカピカピになった顔を袖で拭ってぼんやりした。

僕はずっと、みずほさんがほしかった。彼女をイメージして自慰した夜も一晩や二晩ではなかった。もしもあの時こうしていたらと後悔が押し寄せると共に、逃げ出したい心が甘みを求め、何度も夢想した幸福な関係をもう一度想像しようとした。だが僕の頭に思い描けるのは、どこにも出口のない現実の出来損ないだけだった。

いや、それでいいんだ。書いてしまえ。不意に思い立ち、ゼミ部屋のデスクトップ・パソコンを立ち上げ、自分のフォルダに新しいワードファイルを作った。

幸せなんて思い描けるものか。彼女は僕を見てさえいなかったのだ。悔しさや悲しみやいら立ちやいろいろな感情が沸き立っては消え、最後にこの文章だけが残った。読み返すとそこにはもう一人の自分が確かにいて、同じような目でこちら側を見ている気がした。

☆

僕にとってそれは今さらのような気もしたが、重りを飲み込んだような彼女の言葉に、僕はただ黙って頷くしかなかった。

「いつ？」

何かを問う権利があるのか、それは常に僕を取り囲む疑問符だった。

「さ来月、あの人の地元で」

その結婚式に僕は呼ばれないんだろうな。当たり前すぎて無意味な考えが頭をよぎった。バカバカしい、呼ばれて乾杯でも歌うつもりか？

「...よかったですね」

「そう？」

彼女はたぶん謝るのだろう、それで僕は笑うのだろう。僕は続きを待った。気にしないでください。何も謝ることはない。僕としては残念な気持ちもあるけど、それはすごくいいことですよ、そう思います。

でも彼女は何も言わなかった。突然電話で呼び出された七月はただただ蒸し暑くて、見上げる青空には輪を描いたような太陽が幾重にも光を散らばせていた。セミの鳴き声がうるさくて、それはセミのせいであって決して僕のせいではないのだと言い聞かせる自分が、何もかもがバカらしかった。

「違うの」

「え？」

彼女はうつむいたまま地面を見つめていて、僕は思わず彼女の足もとを見た。そこにはもちろん彼女の二本の足があって、夏用の白いサンダルを履いた素足がペディキュアのピンクを軸に少しだけ揺れていた。ただ広いだけの公園にある木製の日陰があるベンチで、それは時を焼きつけるみたいに強烈な日差しが全てを覆う中で、僕らはまるでその真夏の底に取り残されたような気分だった。

「何が違うんですか？」

「...ごめん」

僕には意味がわからなかったが、それ以上何か尋ねることもできなかった。決して何も始まらない終わり。僕はそれをただじっと見つめていた。

その日、公園の近くにあるホテルで、僕たちは寝た。白い看板に水色の建物だった。入る頃には蒸し暑かった天気も、出る頃には影を長く伸ばし涼しげなそれに変わっていた。

彼女の中で何が起こったのか、僕にはわからなかった。今でもわからないし、たぶん何も変わってはいなかったんだろうというのが僕の結論だ。必要なものは全部彼女の中であって、それは最後のきっかけみたいなものだったのだと思う。ただ僕にとって初めてのセックスは、きっかけでもなんでもなく、それは不細工なりに精巧に作られた見世物小屋のロウ人形みたいに、実に真剣で滑稽だった。

シャワーを浴びて彼女の待つベッドに入った後、僕が初めてであることを告げると彼女は少し苦しげな表情をした。僕はそれをどこかで見たことがあると思った。僕はざっと、大切な誰かにそういう表情ばかりさせてきたのかもしれないと思い、動揺した。彼女はそんな僕を見つめ、でも少し笑って、小さく首を振った。どこまでも親密で、

寂しげな笑い。彼女はそれで何かを僕にあげようとしていて、狂おしいほどほしかったそれは夏の抜け殻みたいな手ごたえで、彼女が僕の間を見つめ、一度逸らし、また見つめ直し、鼻の上から頬にかけてぎゅっと紅潮し、目を閉じて眉をしかめ、二度下唇を噛む様子を、まるで夢の出来事みたいにずっと眺めていたように思う。射精が終わった後で、彼女は僕に背を向け小さく泣き、僕はその頭をあごの下に腕で抱えこみ、そのまましばらくじっとしていた。

父親との生活はそれからもしばらく続いたが、住みついて二週間ほどで、僕は父親にもう帰ってくれと頼んだ。僕には僕の生活がある。あなたの暮らしは実家でもなんとなかなるはずだ。三世帯住宅だったそれも今や父親ひとりきりになってしまったが、それでも、僕ももう限界だった。

父親はしぶしぶ承諾した。正確には、承諾したような態度をとった。「ああ、わかった」と彼は言った。

その日、僕は大学の講義に出るため十時には家を出たいと言い、そのとき父親も一緒に僕の家を出た。それが約束だった。僕は彼に新幹線代の一万円を渡した。それが母から来たものであることを僕は黙っていた。

しかし、僕が五時過ぎに家へ戻ったとき、父親はあのはじめの日と同じように僕の部屋の前に座っていて、僕は思わず、背筋に何かいやなものが走ったと思ったときには後ろを向いて駆け出していた。父親が慌てて僕の背中を追うのが見えた。

息が白い。一月はプロにはいい季節かもしれないが、にわか仕込みのランナーには底冷えする寒さだ。夕日は山すそに引っかかり道順はデタラメだったが、とにかく僕は走った。父親も懸命に後を追った。なんだかよくわからなかったしどうしようもなく間抜けな光景だったが、それでも我々の筋肉は寡黙で額の汗は真剣そのものだ。背後に父親の荒い呼吸音が聞こえ、それがいやで急な上り坂を登りきり不意に何もかもがバカらしくなって振り返ると、そこに父親はいなかった。どうしていいかわからずとりあえず傍の公園に入ると、しばらくして父親は街灯の下に現われ、公園を仕切る低い柵に左手をもたれずええ言っていた。その姿は最後の一滴を絞り出すような夕日の下であまりにも、何と言えいいのか、どうしようもなく、僕はただそれから決して目を逸らさないでいようとそのとき思った。いいだろう。我々は親子で、しょせん地続きなのだ。

僕は自販機で買ったスポーツドリンクを手近寄り、父親へ軽く放った。「オヤジ、ほい！」

なんのことはない距離だったが父親は危うくそれを拾いそこね、缶は小さな音を立てゆっくりと坂道を転がった。誰も後を追わなかった。

今でも、それがどれほど月並みであろうと、その缶がカラカラと転がる音を息苦しい肺いっぱい覚えている気がする。いつかは二人で走りまわった話を笑いながら語るのかもしれない。

父親は翌日実家に帰り、半年後にはそれを小さく改築し直し、余った土地を生かして畑作りに精を出しているようだ。この一件以来、母がときどき顔を出しているらしい。

そして翌年の冬のある日、家に帰ると留守電のランプが点滅していて、父親の声が録音されていた。自分が元気であることを告げた後、前の冬に世話をかけたことを詫び、そ

の後で、楽な死にはあるが楽な生き方はないのだと語った。お前にもそのうちわかると彼は言った。僕はそのメッセージを消しながら、不恰好な世界にひとしきり、鈍く笑いを送った。

★

これだけ書きあげるともう深夜だった。夏も冬もごちゃ混ぜだったが、書き終えてすつとした。そのために書いたのだ。ある程度読み返して推敲すると、僕はパソコンの電源を落としてゼミ部屋を出た。

しかし現実に立ち返れば、家に父親がいる事実はなんら変わらず、帰る足が重かった。タバコや安酒、ツマミの匂いでむせ返るように息苦しい部屋を想像し、それだけでやり場のない憤りが込み上げてきた。

父親には退職金の半分以外に、祖父母が死んだときに入った遺産があるはずだった。軋轢に苦勞した母よりも圧倒的に多くの金額が彼の手に残ったが、母はかまわず離婚した。そのほうが安心だと母は言った。「お金さえあれば、あの人がのたれ死ぬとか、使いたくもない気を使わなくてすむから」。

僕も母と同じ気持ちでいることに気づく。何と書いていいかわからない。恵まれた家族もいれば、恵まれていない家族もいる。それだけのこともかもしれない。母は何度も、自分の結婚は間違いだったと言った。初めから、結婚するときから父親のことが好きではなかったのだ。夜の生活も苦痛だったと。僕は夫婦間レイプで産まれた子供だと思ふときもあった。だからなんだということはない。五体満足で、二人兄弟の二男で、親の金で大学にも行かせてもらって、何も問題なんてない。俺の中途半端でクソな絶望は、しょせん大した私小説にもならない。

そう思ったのは近所の小さな橋の上で、あぜ道の間を流れる細い川から妙に生ぬるい霧が立ち込め、雑草の茂る薄暗い川辺を現実離れした風景に変えていた。

橋の欄干から下を覗くと、不気味に光るモヤが立ち込める暗闇に、僕は見た。

それはもう一人の自分が橋の下からこっちを見上げている光景だった。銀白色のモヤに映った、小さな街灯が伸ばした僕の影だ。彼は僕を見ている。僕が彼を見ているのと同じように。僕は何かを言わねばならない。僕に向かって、彼が言わんとしている言葉を僕は理解する。

そっちが本当の世界じゃなかったのか？

だがそれはすぐただのモヤに浮いた影に変わり、切れたそこから川面が見え隠れした。黒い流れだ。もう向こう側はない。そこで行き止まる世界の果てだ。僕はそれを見つめ、しばらくしてまた歩き出した。家路につく道すがらそれでも僕はもう泣かずに、不意に出た『やましいたましい』を口ずさみながら、いつかどこかにいる誰かの温もりや肌の柔らかさを呑気に思い描いたりした。どうせ明日も生きるなら、夢はみるだけで、その想像力が現実の自分を超える。そう素直に思えた気がしたのだ。

☆

奥付

銀の夜

著者：弦楽器イルカ

感想はこちらのコメントへ

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21211>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

銀の夜

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
